

えんぼとたんぼの始発駅 里山ビオトープ二俣瀬	会 報 第 270 号	2024年1月25日 里山ビオトープ二俣瀬をつくる会 編集責任者：原谷 一誠
---------------------------	-------------	--

1. 年頭挨拶 (原田会長 記)

令和6年あけましておめでとうございます。

この記事に記載するときは、「能登半島付近の大地震」夕方には「羽田空港の飛行機事故」と、とてもお目出たい年頭のお話の出来る新年ではないと感じている。

昨年総会において会長職の継続とビオトープでの活動が体力の限界と家庭内の事情に伴い、私個人が辞退する旨を述べて更に、会長職以外にも事務局やその他の役員も辞退者が出て「里山ビオトープ二俣瀬をつくる会」の解散を決議し、6年度は最終的に宇部市から委託事業の業務を辞退することに決定した。

したがって残りの1年間で宇部市に、創生時に近いビオトープフィールドにて申し送るべきと、活動計画を考え、そのように進んでいると判断する。年が明け残る3カ月はかなり厳しい活動になるかもしれません、毎回多くの賛同をいただき完璧に申し送りたい、4月の解散までには厳しい活動を依頼することもあると思います、よろしくご協力をお願いいたします。

2. 活動報告 (事務局 記)

—1月21日(日) 今年最初の作業は、会員17名にて、ため池のエコアップで除草、除草した草を運搬、真砂土を運搬してイノシシが掘ったところを修復、修復が必要な所を竹を打ち込んで補修、パイプ倉庫の不要な木材などを撤去、撤去した木や草を焼却しました。

3. 今後の予定 (事務局 記) ◎行 事

- 2月4日(日) 維持活動(修復作業)
- 2月18(日) 維持活動(エコアップ、修復作業)
- 3月3日(日) 維持活動(修復作業)
- 3月17日(日) 維持活動(エコアップ、修復作業)、会計監査

4. 来訪者の声

今回はありません。

5. 会員の声

★「会報270号発刊によせて」 （相談役 今井和男 ）

はじめに：「里山ビオトープ二俣瀬をつくる会」は2001年3月竣工いたしました。同じくして会報第1号が2001年5月に発刊されました。更に会報第100号が2009年12月に発刊され、会員の声により「10年の歩」とした立派な簿書を作成し保全されており、最終号270号を迎えることになりました。

まとめ：会報第1号から270号の間、23年間編集各員の皆様方の努力に敬意を表するとともに編集委員長原谷一誠さんに深く感謝の意を表します。

お願い（今後の対応）：今後は行政が中心の活動広報になると思いますが、引き続き充実した指導をお願いする次第です。

★「親子自然観察隊のこと」（観察隊隊長 管 哲郎 ）

「里山ビオトープ二俣瀬を作る会」の下で、20年近く親子自然観察隊を見守ってまいりました。

今になって振り返れば、あれもこれもやっておきたかったことはあったのですが、筆者を含め管理する方々の年齢がどんどんと高くなり、「気持ちはあっても体がついてこん！」状態となり、ついにビオトープの終焉を迎えました。

その間にいろんな方々のお声をいただき、「素晴らしい取り組みだから、やめないで！」とか「こんな経験のできる組織は知らなかった、すごいと感じた！」などなどお褒めの言葉をいただいています。しかしながら一方では“夫婦共稼”ぎのためや“シングルマザーの奮闘”などで、子供たちに良い思い出をなかなか作ってあげられない若いご夫婦、親子がたくさんいらっしゃることを痛切に感じています。

終戦直後に生まれた私たちは、物のない時代に生まれ育ち、両親とも出稼ぎに行きましたので、お盆と正月でしか親に会うことができませんでした。祖母や祖父に育てられましたが、逆に近所の子供たちと仲良く遊び暮らす生活を送りました。

“親は無くても子は育つ”と言われるように、そんな境遇でも子供たちはへこたれず、元気に育ちます。しかしながら、大切なことはその子供たちを常に周囲の親たちが見守っていたことだと思っています。子供たちは遊びの中でたくさんのいたずら、悪さを無意識のうちに行います。しかし、それを見逃さず大人たちは常に叱っていました、たとえ他人の子供でもです。

現在では、“他人は関係ないから黙っている”だとか“人の子に勝手にかかわるな”とか言って、訴訟にまで発展するような時代です。さらに、筆者は九州の田舎出身ですが、家の戸を全く閉めずに（鍵をかけずに）ほとんどの家庭は過ごしていました。が、外国人が日本の国に大勢入るようになり、危険になりやむを得ず戸締りを余儀なくされています。

このような時代でも、人間関係の大切さは変わらないと思います。罪を犯す外国人では、生活できずに、頼れる知人や人がいないのでやむを得ず犯罪に手を染めている方もおり、最初から罪を犯すために入国する人はごくわずかだと思います。

現在の社会構造でも同様、お金儲けのため、理不尽に社員を攻め、成績が上がらなければ簡単に切り捨てるといふ、社員を人間として扱っていないがゆえに問題が発生するような場合も多くあるようです。親子自然観察隊の趣旨は、まず人間関係をよくし、趣味を通じて“いろんな考え方の人がいる”ということも学んでいただきたいと思います。人との交わりが苦手で、1年間でどうしても友達ができなかったとしても、自然と向き合うことで、自然の良さを味わえていただけたと思います。

親たちから見て、全くその子にとって得るものがなかったようでも、本人にとっては必ず得るものがあったと思います。生まれた時から家と学校と会社の往復に人生を過ごされた方が大勢いることと思われますが、もともとヒトのDNAは自然の中での活動に心が動かされるはずで、火を焚き、お餅を作り、冷たい雪にホホをなぶられ、熱々の“おこわ”を食べ、知らない友達と一緒に餅を丸め、あるいは川の探検、昆虫採集、野鳥や野草の観察、タケノコ堀などなどの行事を通し、その子にとってどこかに心動かされるものがあったのではないのでしょうか。

観察隊にいるうちにそんなことを感じ取っていただければ十分で、全く“面白くなかった”としてもそれで十分だったと思っています。子供の感性を発掘することも大切なことだと思います。ゲームのほうが好き、スポーツがやりたい、本を読みたい、などなどいろんな感覚がありますが、その中で親子自然観察隊は子供たちの中に何か得るものがあつたはずで、親子自然観察隊に触れていただき、“楽しかった！”と感じていただけたとも思っています。十分にお世話できなかったこともありましたが、一緒に遊んでいただき、ありがとうございました、御礼申し上げます。

★「つくる会解散にあたって」（事務局長 関根雅彦）

里山ビオトープ二俣瀬は山口県の水環境21創造事業3件の1つ、休耕田にラグーンを整備して水質浄化する施設として計画されました。その施設に当時まだあまり知られていなかった「ビオトープ」の名を冠したのは行政のヒットでしょう。実施場所は公募に応じた二俣瀬に決定され、2000年9月28日、「（仮称）ビオトープ二俣瀬創造の会発会式」が開催されました。多自然川づくりやゲンジボタル再生の研究を行い、住民参加を論じる学会に所属していた私は、行政からの依頼で学識経験者として発会式の末席に着座していました。会場には県内各地からボランティア希望者や行政あわせて30名程度の人々が集まっていました。皆、環境に良い施設を造りたいという意欲にあふれており、発会式から年末にかけて、どのような施設を建設するか精力的に議論されました。もともと自然豊かな二俣瀬にビオトープを建設する意義の議論を通じて、やはり当時まだ耳新しかった「里山」というキーワードが付加されたのもこの時です。私はできるだけ多くの方の想いを取り入れたいとの考えから議論を遅らせる発言をしてしまい、当時の今井会長から大目玉を食らったのも今では良い思い出となっています。12月23日にはヨシで埋め尽くされていた須賀河内川を皆で草刈し、1月21日に起工式、それから春まで、毎週土曜日に皆が集まって、ほとんど手作業でビオトープの建設に取り組みました。私は、会議で造るものを決めたら業者が重機で造ってくれるのだろーと思っていたので、本当に驚きました。しかし、原田事務局長（現会長）の現場での強力なリーダーシップの下、どんどん建設が進んでゆき、5月13日には宇部市長の臨席のもと通水式を迎えることができました。ほとんど数人で研究活動をしてきた私にとって、人間が力を結集したらこんなにすごいことができる！というのは大きな感動でした。自分で作った階段の前に立って、いっしょに作業した行政の方と記念写真を撮ったのを思い出します。この期間の思い出が、多くの創設メンバが長年活動を続けることができた原動力だと私は思っています。私は当初こそ大学教員ということで専門知識を期待されていましたが、そのうちなんでも知っているわけではないことがバレ、長年ヒラ会員として楽しく活動しました。テキストや論文では得られない貴重な現場体験ができ、研究にもプラスだったと思います。15年目に年の功で事務局長の名前をいただき、現在に至っています。

さて、創設から23年、会員の新陳代謝はそれなりにありましたが全体に高齢化してしまい、この度つくる会の解散を迎えることになりました。来年度以降、宇部市が事務局となって主に市民の環境教育に利用されていく計画と聞いています。私は宇部市から新事務局の会長を打診されており、少しでもお役に立てるのならお引き受けするつもりです。まだ来年度の活動は具体化していませんが、草刈りなどの重労働は外注し、現会員のうち希望される皆様は、「(仮称)里山ビオトープ二俣瀬を守る会」として主にエコアップなどの環境保全活動に取り組んでいただけるようになるのではないかと考えております。宇部市から詳細の発表がありましたら、是非ご参加くださいますようお願いいたします。

「守る会」参加の願いの一方で、つくる会創設当時の熱気を思い出すにつけ、できることなら、環境を守りたい若い人たちが集まって熱い議論を交わし、新たな「つくる会」を創設してくれないか、自由な発想で環境保全のフィールドをつくり上げてくれないか、という期待も捨てていません。そんな人たちが現れたら、「守る会」は喜んで身を引くし、求められるなら喜んでお手伝いするでしょう。やる気のある人、集まれ！

★戸成典枝

初めて親子観察隊に参加して二俣瀬ビオトープに行ったのは、15年前、上の子が4年生、下の子が年少でした。特に下の子は本当にどうかん坊主で、30年前に生まれていたら良かったらと思うぐらい自由な子だったので…里山で生き生き、のびのびとさせてもらって本当に良かったです。またお兄ちゃんのこうへい君が大好きで、いつも後ろにくっついて里山の中を走り回ったのを、昨日のことのよう思い出されます。

里山では色々な体験をさせてもらいました。思い出深いのは、やっぱり親子で参加していた時の川下りや里山探検(きのこや冬苺など)、そば打ち、竹細工等々ですが、じっくりと池の中を覗く、空をみる、風を感じる、そして皆さんと活動する、とても贅沢な時間を過ごしていたんだと、今更ながらに感じています。つくる会が解散されるのはとても寂しいです。皆さんが日々活動され、お世話をしてくださったから、こんなにもいい体験、時間を過ごさせていただけました。本当にありがとうございました。

6. ビオトープ関連：「山口県の昆虫たち」 （ 管 哲郎 記）

(95) リュウキュウコオロギバチ *Liris albopilosus* ミツバチ上科ギングチバチ亜科

文字通りコオロギ類を狩るハチです、メスの体長は18～33 ミリ、オスの体長は13～20 ミリとメスが大きいです。体色は黒色で脚は黒褐色、メスは体の一部に金色短毛が密生しており、腹部には同色の3つの帯があります。黒っぽいハチですが存在感があります。その他8種類の同種がありますが、よく見られるのはナミコオロギバチとヒメコオロギバチです。

3種とも目玉が大きいことが特徴です。



リュウキュウコオロギバチ メス



コオロギを狩ったメス



ヒメコオロギバチ



ナミコオロギバチ

7. 会よりの連絡事項

- 1) 会報は270号になり、これで終了とします。皆様の御協力に感謝申し上げます。
- 2) 来年4月頃に解散式（今年度の活動・会計報告など）を予定しています。

8. 編集後記

★中本亜矢子

発足時から約23年間、この会に参加してきました。入会当時はまだ30代。仕事と子育てのため欠席も多かったのですが、他ではできない貴重な体験をさせていただきました。維持活動を始め、親子自然観察隊、生物多様性会議への参加、補助金申請のためのプレゼンなど、どれも思い出深いです。そこに行けば仲間がいて、よもやま話をしながら作業する。そんな日常が当たり前だったのに、4月からは本当になくなってしまおうのか…と寂しく思います。つくる会のみなさんには感謝しかありません。いつも温かく迎えて下さり、ありがとうございました。長年にわたり会報を発行して下さいました原谷さん、お疲れ様でした。

★「創刊270回（最終号）に寄せて」 原田満洲夫

西暦2000年（平成12年）「里山ビオトープ二俣瀬」が発足し23年間、この水環境創生事業の一環を我々の手で作り上げ、維持管理しながら自分なりに知識を吸収してそれなりの活動を曲がりなりにも一生懸命継続できたと思う。

その中で3大コンセプト1)環境教育の場 2)市民憩いの場 3)二俣瀬をアピールする場、いずれもこの会報発刊で「里山ビオトープ二俣瀬」をいずれのコンセプトもフオーロできたのではないと思う。発刊は少し遅れたものの23年間270号と長く続いてきた。活動もさることながら機関誌などのは、たいがい初めは賑々しく発刊されるもいずれ尻きりトンボが相場である。

当会の会報においても、したり！当初は7～8ページと賑々しく、当地区の歴史、名所、生活なども投稿で賑やかし又動・植物の専門家による解説やエコアップに通じ、非常に二俣瀬地域の知識も含め自然環境の勉強になった、ホームページと合わせて地域外にも賑々しく広報活動が拡充されていた。

しかしながら、やはり世間一般と同じく最近においては、新しいニュースもなくマンネリ化の傾向となっており、活動日の会員の方々へ再々の投稿呼びかけにおいても3～4ページと投稿記事が少なくなってきた。

本体の「つくる会」の活動の中止が今年度（令和6年3月）いっぱいになろうとしているので、この会報もキリのよい270号で閉刊となりますが、原谷編集長他編集局員皆様の長年のご苦勞に感謝して最後の投稿とさせていただきます。

★松本フデ子

今思えば二十数年前ビオトープと言う言葉さえ又どんな意味を持つかさ全く無知だった。市広報での募集に何をするのか分からないまま顔を出して以来今日を迎える。あの頃は皆若かった、体も動いた。希望を持って試行錯誤しながらビオトープ二俣瀬をつくって来た。そして体が思うように動かなくなり維持管理の大変さを痛感。でも私達が手を引いても残す事が出来る、この貴重なビオトープ二俣瀬を。少しでもいい状態で引き渡す事が出来るようにと最後の心を込めて。みんなのビオトープへ、そしてこれからの子供達にもこのフィールドを活用して自然へ目を向け関心を持って欲しい。

★前田 歳朗

ビオトープでは、今月に入り湿地帯、蓮田でアカガエルの卵が産み付けられています。昨年の同時期より、卵塊の数は多い様です。来年以降も、この様な風景を見ることが出来れば良いのですが。このためには、除草と水路の管理が欠かせません。来年度、ビオトープは“守る会”に引き継がれ、維持活動の主体もエコアップになる見込みです。しかし、作業内容を精査しないと難しいと考えます。エコアップ以外に多くの作業が待ち受けているからです。例えば、21日には猪に掘り返された部分の追加作業があります。新たに組織される“守る会”では、維持活動の内容について議論されることが重要です。ビオトープのあるべき姿を明確にし、必要な作業項目を挙げ、その優先順位を決めなければなりません。そうしないと、エコアップ主体とは名ばかりになります。来年度からの“守る会”の活動詳細は、まだ明らかではありません。少なくとも、ビオトープの現状維持が出来るような維持活動を望みます。草が生い茂り、外来動植物が。闊歩するようなビオトープは訪れにくくありません。

★若林正治

会報最後の編集後記を書いている、本日未明に月面に日本の探査機が着陸したらしい。世の中色々有るみたいだ、そんな中ホームページを見直した。23年間の活動が見れる。「里山ビオトープ二俣瀬をつくる会」は解散するが立派な活動だった事がよく解る。そもそもホームページを始めたのは、仕事の都合で活動にはあまり参加出来ないと思い、その穴埋めに始めた。なんとか長年にわたり続けて来れたのも皆様の御蔭だと思っている。作る会には会報、SNSもあり情報発信にも恵まれている、その一つの会報がこの270号で終了してしまう。270号もの発刊には大変な努力が必要だったと思う。編集責任者の原谷さん大変お疲れ様でした。そして会報に携わった皆様にも有難うの感謝を伝えたい。

★大野靖子

「里山ビオトープ二俣瀬」との出会いは、2003年の春でした。当時宇部市内の「フジときららネットのこどもエコクラブ」という団体に所属していて、企画進行担当の方が「今度ビオトープで活動するけど下見に一緒にいく？」とお誘いくださり、ついて行ったのがはじまりでした。この時、「ビオトープ」という名前をはじめて知りました。子どもたちと行っているいろいろな生き物を見つけ、講師の方々に名前も教えていただけて「これはおもしろいな〜！」と思い、その後入会しました。

作業や親子自然観察隊ではじめて見る生き物、ホウネンエビ、コオイムシ、モクズガニ…子どもの頃は田んぼも山もあるところでしたが、そんなにまじまじと生き物を見ることはなかったため、楽しい日々でした。エコアップの時も忍者のお話で出てくるヒシの実や、珍しいというデンジソウ、アサザ等を教えていただき、トンボの羽化もはじめて見たりと、「はじめてづくし」のわくわくする日々でした。

途中、仕事でなかなかうまくいかないことがあって少しいつ気味になっていた時期があり、そのような時、ビオトープに来れば作業に集中し、東屋での休憩時間はみなさんが楽しくわいわいとお話しをされている中、ぼーっと自然を眺めて過ごすこともできたりして、とても心が救われたという思い出もあります。また、収穫祭など、多世代の地元の方々に参加され、大人数で炊き出しが行われる行事も、同世代の家族構成が多い新興住宅地で育った自分にはとても新鮮な体験でした。

その後、結婚をして周南市に移り住んだことから、周南市で子どもの自然体験活動を行いたい、主人たちと「福川こどもクラブ」を立ち上げ、活動をするようになりましたが、

もちろん当クラブでも年間プログラムの1つとして、「里山ビオトープ二俣瀬」での活動をさせていただき、長年お世話になりました。令和2年度以降はコロナ禍で活動があまりできませんでしたが、今年度実に4年ぶりにビオトープで活動させていただきました。当クラブのあるスタッフが、「年度初めは、はじめてクラブに入ってくる子ども達も多いので、フィールドとしてスタッフの目の届きやすい、そしてたくさんの生き物を見つけることのできるこのビオトープは、第1回目の活動フィールドとして本当にぴったりですね。」と話していて、まさに同じ思いです！と思いました。

入会当時は生まれていなかったわが子達も今、中学生となりましたが、沢登りや、田植えや草取り、餅つきなど、小さなころから大変お世話になりました。感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

来年度以降はどのようなになるのか。寂しい気持ちと不安な気持ちもありますが、通えるかぎり参加したいと思います。よろしくお願いいたします。

★原谷一誠

2000年9月のつくる会が発足した時は、ビオトープとは何かも解らない状態でしたので、2001年9月にビオトープ管理士の資格試験を、2003年6月にグリーンセイバーの資格試験を、2003年8月に自然観察指導員の講習会を受けて知識を得ました。そして多くの友人にも出会うことが出来て、山口県の多くの場所を訪ねて両生類の調査にも参加することも出来て、とても有意義な知識を得ました。個人としては、2011年～2014年に二俣瀬と霜降山でカスミサンショウウオを主体に両生類を調査し、どのような場所に多く生息しているかを知ることができました。はじめ確認できた場所も数年後にはいないという状況も確認し、ビオトープのように人手が入り、外来種を除去するなどの維持に努め、生物多様性を保つという里山の維持管理がとても大切であるということを感じています。あとはこの貴重な場所が維持されていくことを願うのみです。